早稲田大學圖書館所藏の宋人別集について

王　嵐

二〇〇七年八月、筆者は北京大學から交換研究員として早稲田大學に赴き一年間滞在した。それから五年が瞬く間に過ぎたが、この間、常に日本の諸先生や友人との交遊があり、折りにつけ筆者に日本での訪問研究の時の記憶を思い起こさせてくれる。

早稲田大學圖書館は數多くの漢籍を收藏しており、中央圖書館四階の特別資料室と地下一、二階の研究書庫に配架され、すでに完備した漢籍目錄が讀者に提供されている。筆者はこれまで一貫して『全宋詩補正』編纂のグループプロジェクトに關わっているため、最も關心を寄せたのは、同館收藏の宋人別集であった。以前、筆者は『早稲田大學圖書館所藏漢籍分類目錄』[1]によって初步的調査を行い、特に特色のある宋人別集を選び、一つ一つ閲覽して記錄した。今回、早稲田大學古籍文化研究所、復旦大學古籍所、北京大學中國古文獻研究中心の三機關合同による「漢籍と日中文化交流―日中古典學者學術シンポジウム」が開催されたので、早稲田大學圖書館所藏宋人別集の全體的な狀況を整理しようと思い立った。この理由の一つは、四、五年前に行ったまま未完の調査結果をまとめるためであり、もう一つは、今後早稲田大學所藏の關連する分野の漢籍を利用する研究者に役立つだろうと考えたからである。

一、宋人別集の數量

『早稲田大學圖書館所藏漢籍分類目錄』の「集部・別集類」に收錄される宋人別集は「北宋之屬」と「南宋之屬」に分けられている。

「北宋之屬」に收錄される宋人別集は五十二種、作者は十六人、柳開、穆修、尹洙、蘇洵（二種）、歐陽修（二種）、釋契嵩、邵雍、釋道潛、曾鞏、司馬光（二種）、王安石（四種）、秦觀、蘇軾（二十六種）、蘇轍（二種）、黄庭堅（四種）、釋惠洪である。[2]

「南宋之屬」に收錄される宋人別集は五十四種、作者は二十三人、陳與義、李剛（三種）、岳飛（五種）、朱松、曾幾（二種）、王十朋、張栻、陸九淵（二種）、范成大（四種）、陳亮（六種）、朱熹（三種）、陳溥良（溥は傅とするべきである）、楊萬里（二種）、陸游（八種）、周文璞、釋居簡（二種）、高翥、方岳、劉克莊、何夢桂、眞山民、王炎午、文天祥（五種）である。

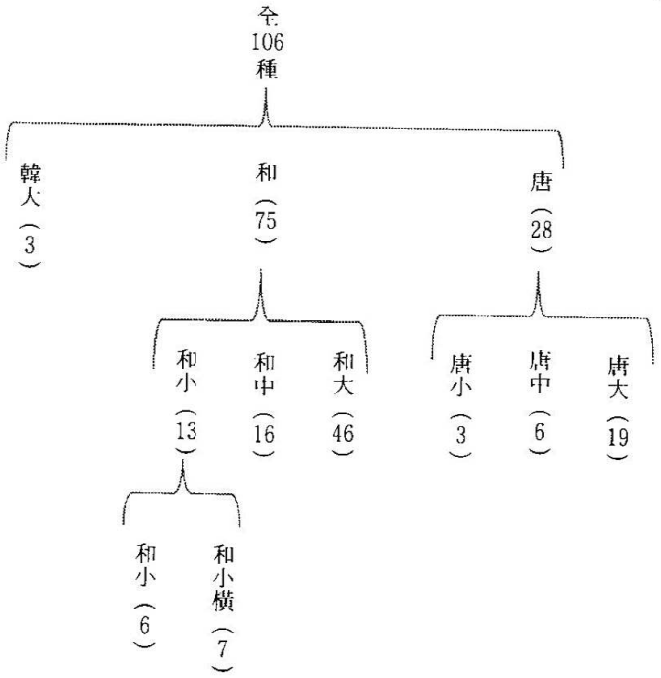
以上の宋人別集は合計一〇六種、作者は三十九人であり、多くは大家とされる人物である。このうち、數が多いのは、順に蘇軾（二十六種）、陸游（八種）、陳亮（六種）、岳飛（五種）、文天祥（五種）、王安石（四種）、黄庭堅（四種）、范成大（四種）、李綱（三種）、朱熹（三種）である。これらの人々は大文豪や大詩人、あるいは忠節を守った人物や學派の領袖であり、いずれも古今天下に名の知れ渡った人々である。

二、版本の類型

1．地域による文類

早稲田大學に收藏されている宋人別集の版本類型を地域によって分類すると、中國本、日本本、朝鮮本の三種類に分けられる。『早稲田大學圖書館所藏漢籍分類目錄』では「唐本」、「和本」、「韓本」と稱している。これら三種類の統計結果は次のようになる。

圖1



書物の大きさは、多い順から和大（四十六）、唐大（十九）、和中（十六）、和小（十三）となり、明らかに和刻本が多くを占めている。

2．形式による分類

上述した一〇六種の宋人別集を抄寫、印刷といった書物の制作方法で分類すると，刻本、寫本、活字本、石印本、影印本の五類型に分けられる。このうち、刻本が大多數を占め、八十三種ある。刻本以外は次の通りである。

圖2

	寫本	活字本	石印本
1	參廖子詩集	宋大家曾文定公文抄（銅活字版）	王臨川全集
2	山谷詩集注（古寫本）	司馬文正公傳家集選（木活字版）	
3	岳忠武王集	雅誦（銅活字版）	
4		誠齋先生錦繡策（木活字版）	
5		北磵詩集（木活字版）	
6		茶山集（武英殿聚珍印本）	
7		同右	

このほか、やや遅い時期に出版された影印本や複製本が十二種所藏されている。宣統年間（一九〇九～一九一一）の南匯沈氏國光社本（一種）、四部叢刊本（四種）、北京圖書館藏本影印本（二種）、北京圖書館藏本複製本（五種）である。

3．編纂形式による分類

以上の宋人文集を編纂形式から分類すると、大きく詩文別集（個人の詩文全集）と選集に分類される。

一般的な意味での詩文別集は、編纂者が捜し集め、編輯した結果として、ある作者の詩文作品が完備した書物である。このような文集は五十三種あり、圖書館に收藏されている宋人別集のちょうど半分を占める。殘りの半分は選集であり、一定の原則に從って當該作者の一部の作品を選擇、編輯している。選集には「文抄」、「集選」、「詩抄」、「詩選」といった一般的な詩文選集が四十三種あり、このほかにも主題別の分類の選集が十種ある。例えば、蘇軾や黃庭堅と他の人々の往來書簡を文集から摘錄し編集した『東坡尺牘』や『東坡先生翰墨尺牘』、『山谷老人刀筆』がある。また、蘇軾が禪を語った文章や他書の記載を集めて編纂した『新刊東坡禪喜集』、蘇氏の小品文のみを集めた『蘇長公小品』、蘇軾の雜說や詩論を

集めた『東坡先生志林』などがある。

三、特色ある版本

選集をのぞいて、早稲田大學圖書館に收藏されている一般的な意味での宋人の詩文別集は宋人別集全體の半分を占めており、五十三種に達する。筆者はこの範圍の中で調査を行い、各別集の特徴によって一部の詩文別集を選んで閲覽し、比較したところ、以下の十種の別集は版本上の特色や價値があると考えられた。

(一)　宋刻元修本

1.『後村居士集』

『早稲田大學圖書館所藏漢籍分類目錄』には「五〇卷（卷五至一七・四六至五〇缺）・目二卷　宋・劉克莊撰（淳祐九年序）六册　唐大」とあり、圖書記號は「特へ一六―二八五五」である。

同目錄には、『後村居士集』の刊刻年代について何も記されていない。しかし、劉玉才教授「關於早稲田大學圖書館所藏的『後村居士集』」の考證によると宋刻元修本である。[3]

この『後村居士集』は三十二卷が殘存しており、卷前には淳祐九年（一二四九）林希逸の序がある。本文は半葉十行、行二十一、二十二字など不等、細黑口、左右雙邊であり、四周雙邊の箇所もある。版面には欽損があり滲んで不鮮明、版木に割れがある。岐阜縣の乙津寺、柳澤眞次郎の收藏を經ており、書衣には「乙津什寶、不可輕書之」の文字がある。昭和二十六年（一九五一）五月十八日に早稲田大學が購入した。

劉玉才教授は二〇〇四年、早稲田大學圖書館において『後村居士集』を閲覽し、書箱の中に「靜盦」の落款がある便箋を發見した。便箋に書かれた題記には、當該本が南宋の刊刻であり、しかも瞿氏鐵琴銅劍樓藏本よりは後印だが、宋刊元修である靜嘉堂所藏の皕宋樓本よりは早い時期のものだと記されていた。慶應大學斯道文庫の高橋智教授の鑒別によると、この題記は長澤規矩也先生の筆跡であった。劉玉才教授は「長澤規矩也先生の鑑定意見は概ね正確だが、瞿氏鐵琴銅劍樓藏本と早稲田大學圖書館藏本とは系統の異なる版本であり、初印と後印の關係にはない」と考えた。

「靜盦」の印記が鈐された便箋の題記を改めて讀むと、題記には、この南宋刊本が「靜嘉堂藏陸氏舊藏本」よりも早い時期の印刷、「北京圖書館藏本」よりも後刷だと記されており、しかも「瞿影著錄本」[4]とは異版であること、この殘本が劉克

莊の詩文集のうち最初の刊本の後刷であること等が明確に指摘されている。

また、劉玉才教授の調査によると、現存する宋刻『後村居士集』は、中國國家圖書館藏の瞿氏鐵琴銅劍樓舊藏本が別の版本系統である以外、中國國家圖書館や中國社會科學院文學研究所、上海圖書館、臺灣中央圖書館、靜嘉堂文庫所藏の諸本はいずれも同一系統の版本に屬しており、初刷、後刷、飜刻に區別される。しかし、早稲田大學藏本はこれまで日本の關連する書目に記載されておらず、注目されてはいないが、確かに宋刻元修本である。

以上をまとめると、早稲田大學圖書館所藏の『後村居士集』三十二卷の殘本は宋末に刊刻され、元代に重修された本であり、早稲田大學圖書館所藏の宋人別集の中では最も早い時期のものである。しかも『早稲田大學圖書館所藏漢籍分類目錄』では、この點が明らかにされていない。このため、早稲田大學圖書館所藏の『後村居士集』は珍重すべき善本である。

(二) 五山版覆宋本

2. 『山谷詩集注』

『早稲田大學圖書館所藏漢籍分類目錄』には「二十卷　宋・黃庭堅撰　宋・任淵集注　五山版（覆宋版）　一〇册　和大」とあり、圖書記號は「特へ一八―一二八六」である。

五山版の漢籍は、和刻漢籍のなかでも特色のある部類である。鎌倉時代末期（十三世紀中後期）から室町時代後期（十六世紀）まで、これは中國の元、明代に相當するが、この間に鎌倉五山や京都五山の禪僧は繼續して中國の典籍を刊刻した。その多くは宋版を底本としており、現在までかなりの數が傳わっている。

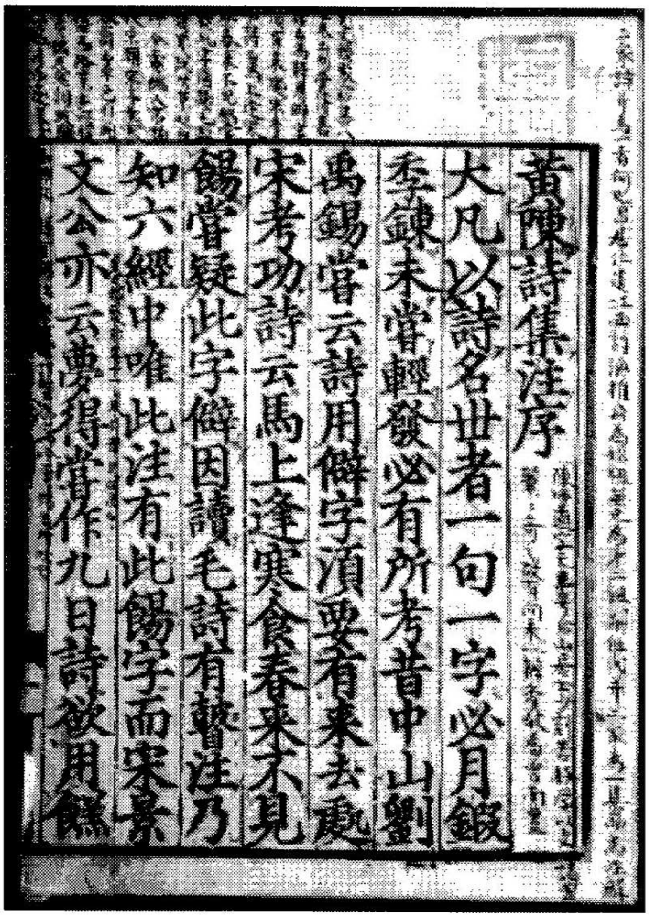
この本の書皮には「山谷詩注」とある。書皮の裏側には一枚の紙が貼附してあり、そこには『經籍訪古志』の一文が手寫されている。

舊刻覆宋本、求古樓藏。『讀書敏求記』云、舊刻『山谷詩注』甚佳、但目錄中『宿舊彭澤令陶令』題下注云、舊本自此以上缺兩板。　…　今吾家所藏、二葉宛在、卷首各題下注腳俱全、前更有紹興鄱陽許尹『豫章後山詩解』一序　…惜乎刻此書者不及見[5]、遂令舉世缺此幾葉、宋本之難得遇如此。其言正與此本符。

（舊刻の覆宋本は、求古樓の藏なり。『讀書敏求記』に云う、舊刻の『山谷詩注』甚だ佳し、但し目錄の中『宿舊彭澤令陶令』の

題下注に云う、舊本は此れ自り以上兩板を缺くと。　…　今吾家の藏する所、二葉宛かも在り、卷首の各題下の注腳は俱に全し、前には更に紹興鄱陽許尹『豫章後山詩解』の一序有り　…　惜しいかな、此の書を刻す者見るに及ばざるを、遂に舉世を令て此の幾葉を缺かしむ、宋本の遇うことの得難きは此くの如しと。其の言正に此の本と符う。）

早稲田大學圖書館の『山谷詩集注』の卷首には「黄陳詩集注序」とあり、半葉八行、行十四字、「紹興乙亥(6)冬十二月鄱陽許尹謹敘(7)」と署名がある。空白箇所には朱、墨筆の點と假名の注記がある。


黄陳詩集注序
大凡以詩名世者一句一字必月鍛
季鍊未嘗輕發必有所考昔中山劉
禹錫嘗云詩用僻字須要有來去處
宋考功詩云馬上逢寒食春來不見
錫嘗疑此字僻因讀毛詩有瞽注乃
知六經中唯此注有此錫字而宋景
文公亦云夢得嘗作九日詩欲用餳

早稲田大學圖書館藏五山版覆宋本
『山谷詩集注』

本文は「山谷詩集注第一」の下に「豫章黄庭堅魯直、庭堅字魯直、號山谷老人」とある。半葉九行、行十六字、小字は雙行で行款は同じ、左右雙邊、大黑口、書口には「山谷一」の題字が有り、多くは陽文だが、第三十二葉のように陰文のものもある。

卷二十の卷末には「後跋」がある。手寫體であり、半葉五行、行十二字、「紹定壬辰(8)日、南至諸孫朝散郎行軍器監主簿、兼權知南劍州軍州、兼管内勸農事、節制本州屯戍軍馬、借緋埒拜手敬識」と題されている。これにより、同書は黄庭堅の後裔である黄埒が家藏の蜀刻『黄陳詩集注』にある任注黄詩部分を延平（今の福建南平）で重刊したものであることがわかる。

卷首と卷中には「玉林院」、「玉林院文庫」の印が鈐されている。

宋の黄埒刻本『山谷詩注』は中國國家圖書館に殘卷が二部所藏されている。一部は三卷（卷十五、十六、十七）、もう一部は二卷（卷四、五）のみであり、本文は半葉九行、行十六字、

小字は雙行で行款は同じ、白口、左右雙邊である。書口の上端には刻字の字數が題されており、中間には書名と卷數が題されているが、規則的ではない。書口の下端には葉數と刻工の姓名が題されている。この二部は共に殘本であるため、前後に序や題跋はない。

一方、早稲田大學圖書館所藏の五山版は宋本によって翻刻したものであり、行款は宋本と同一であり（書口のみ改變されている）、様子も風格もよく似ているうえ、保存狀態がよく、本文二十卷と前後の序跋が完全に揃っている。このように、この五山版の價値は宋本に劣るものではない。

しかし、今回の調査では一つの問題を發見した。それは、どの『山谷詩集注』が「五山版」に屬するのか、ということである。半葉八行、行十七字の版本と、半葉十一行、行十六字の版本のどちらなのか、または半葉九行、行十六字の版なのか。諸家の指摘はそれぞれ異なる。

例えば、北京大學圖書館藏の慶長、元和年間（一五九六～一六二四）活字本は明の萬曆年間に相當する年代の版本であり、「賜蘆文庫」の舊藏、半葉八行、行十七字である。卷中には李盛鐸の題記が一枚挾まっており、「此日本活字本『山谷詩注』、所謂五山本也、寛永刻本尚在其後…（此の日本活字本『山谷詩注』は、所謂五山本なり、寛永刻本尚お其の後に在り…）」と記されている。

しかし、廣く知られている五山版は、一般的に宋、元版を翻刻したものであり、活字本ではない。しかも應仁の亂（一四六七～一四七七）以後、五山版は衰退した。このため、李盛鐸が慶長、元和年間の活字本を「五山版」としたのは、憶測による見解である。

嚴紹璗教授の『日本藏宋人文集善本鉤沉』によると、和刻本『山谷詩注』の祖本は日本の南北朝の時に宋・紹定年間（一二二八～一二三三）の九行十六字本を覆刻したものである。この後に五山版があり、これは半葉十一行、行二十字である。また、ほかにも寛永十二年（一六三五）の風月宗知刊本や寛永活字版などがあるという。[9]

さらに、臺灣に所藏されている、明代の朝鮮において宋・紹定壬申（五年、一二三二）の延平本を覆刊した『山谷詩集注』二十卷には一九一三年に記された楊守敬の手書題記があり、「此蜀大字本山谷內集……余得自日本、義寧陳君伯嚴欲重價購之、余不忍割、乃議借刻（此の蜀大字本山谷內集……余日本より得、義寧の陳君伯嚴重價をもって之を購わんと欲するも、余割くに忍びず、乃ち借りて刻さんことを議せり）」（臺灣國立中央圖書館『標

點善本題跋集錄』）と記されている。清の光緒二十一年（一八九五）から二十五年まで義寧の陳三立（字は伯言）が影印刊行した『山谷內集詩集』二十卷は、底本を「日本覆宋本」と稱しており、後に上海中華書局もこの影印本によって排印し『四部備要』に收錄した。しかし、今日では陳三立の影印刊刻したものは楊守敬が日本で入手した版本であり、「蜀大字本」でも「日本覆宋本」でもなく、朝鮮覆宋閩本であることがわかっている。朝鮮覆宋閩本の版式は半葉九行、行十六字、左右雙邊、黑口である。

このため、行款の比較から判斷すると、なお二つの可能性がある。一つは「五山版」に多くの種類があり、半葉九行、行十六字のものもあれば、十一行、行二十字の刻本もあった可能性である。もう一つは、「五山版」が一種類のみの可能性である。では、どの版が五山版なのか。筆者は、嚴紹璗教授が指摘した半葉十一行、行二十字刻本が五山版なのではないかと考えている。そうすると、早稻田大學所藏の九行十六字本はおそらく五山版ではない。では、これが日本の南北朝時代（一三三六～一三九二）の覆刻宋紹定本なのか、明代（一三六八～一六四四）の朝鮮版覆刊宋紹定本なのか、あるいはこの二種類の「覆刻宋紹定本」が指しているのは同一の版本なのか、未だ明らかではない。いずれが正しいのか、諸先生、研究者の教示を仰ぎたい。

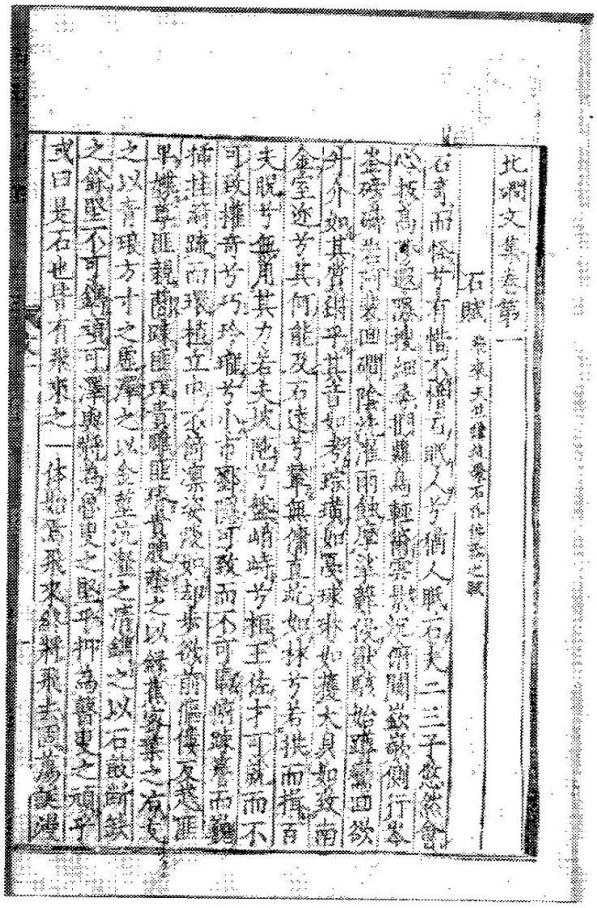
3．『北磵文集』

『早稻田大學圖書館所藏漢籍分類目錄』には「十卷　宋・居簡撰　五山版（覆宋版）五册　和大」とあり、圖書記號は「特へ二〇—一二八三」である。

同書は卷首に「北磵文稿叙」とあり、「嘉定丑十月望日盱江張自明誠子」[10]の撰、「張自明印」などの印記が墨色で版に刻されている。本文は「北磵文集卷第一」で始まり、作者の名はない。半葉十四行、行二十四字、左右雙邊、白口、書口の上端には刻字數が「六百」、「五百九十六」などと有り、下端には「徐」、「賈」、「史」、「仲」など刻工の姓名がある。文中には朱筆の圈點があり、墨筆で假名を注記している。全十卷、卷末には「跋」がある。この跋は「永嘉普觀義問宣子」によって題されており、後ろには「崔尙書宅刊梓」の牌記がある。

『早稻田大學圖書館所藏漢籍分類目錄』はこの『北磵文集』を「五山版（覆宋版）」として著錄するが、書中の序跋や牌記などには、關連する文字が見えない。

中國國內に所藏されている『北磵文集』を調査したところ、



早稲田大學圖書館藏應安覆宋本
『北磵文集』

多くは明清の抄本であって、中國國家圖書館のみに宋の崔尚書宅刻本の原本がある。この行款は「五山版」と完全に一致している。このことは、「五山版」が確かに宋版によった覆刻であり、底本に相當忠實であることを證明している。だが、現在傳わる宋・崔尚書宅刻本はいずれも殘本であり、中國國家圖書館藏本が卷一から八まで現存しているほかは、宮內廳書陵部に所藏される一部が卷七から十まで現存しているだけである。これに對して、早稲田大學所藏の「五山版」は十卷の完本であり、首尾序跋すべてあるため、この版本によって宋・嘉定本の全貌を伺うことができる。

早稲田大學に所藏されているもう一種の寛永木活字版『北磵詩集』（圖書記號は特へ一八—一二八四、以下にて詳述）は合裝されており、題簽に「北磵詩文集」とある木箱に收められている。上下二段に分けて收められ、裝丁は同一、書簽の題字の筆跡も同一人物の手になっており、明らかに收藏者が加えたものである。

㈢ 古寫本

4. 『山谷詩集注』

『早稲田大學圖書館所藏漢籍分類目錄』には「八卷　宋・黃庭堅撰　宋・任淵集注　古寫本　二册　和大」とあり、圖書記號は「特へ一八—六三九」である。

同書の卷前には序文や目次がなく、直接本文「山谷詩集注卷之第一」から始まり、この下には「豫章黃庭堅魯直、庭堅字魯直、號山谷老人」という署名がある。半葉九行、行二十字、小字は雙行、行款は同じである。ただし、卷三のみは半葉八行、行二十字、四周單邊、罫線が書かれているが書口は書かれておらず、葉數も記されていない。寫本の筆跡は行草書の風格があり、漢字の下には假名が注記され、朱筆の圈點

が多く、右下角の邊欄の外には墨印「洛東伍條上行敎寺」がある。

先に紹介した早稲田大學所藏の「五山版（覆宋版）」の『山谷詩集注』二十卷本と對照してみると、こちらの寫本は八卷、すなわち全二十卷のうちの卷一～八であり、しかも卷三、卷四には大量の錯簡がある。この古寫本が書かれた具體的な年代は不明だが、もし「五山版（覆宋版）」よりも早い時期のものであれば、殘本とはいえ校勘價値がある。

(四) 活字本

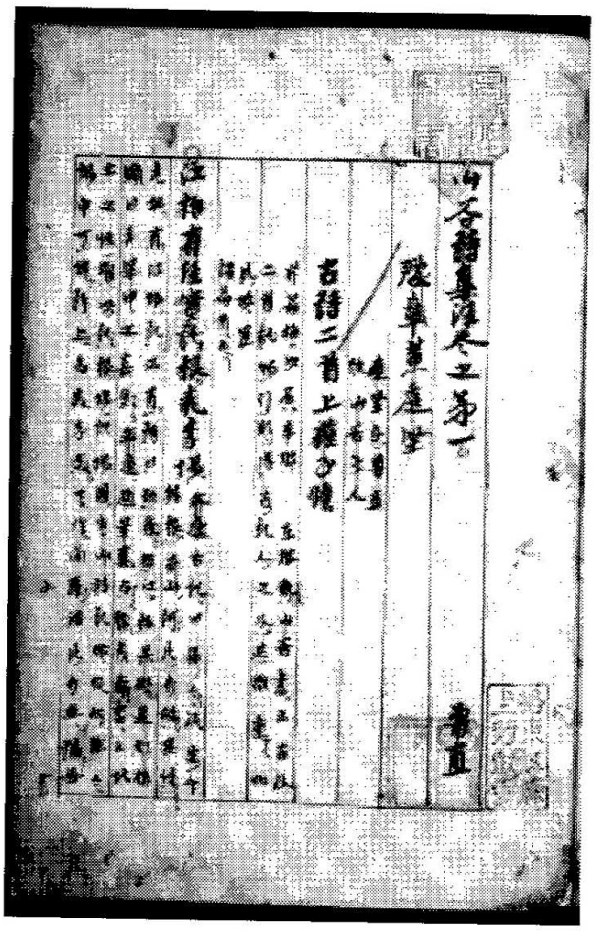
5. 『雅誦』

『早稲田大學圖書館所藏漢籍分類目錄』には「八卷　宋・朱熹撰　李朝正祖命編（正祖二十三年序）　銅活字版（壬辰字）二册　韓大」とあり、圖書記號は「特へ一六―二三一一」である。

卷首には「雅誦義例」、「御制雅誦序」、「雅誦目錄」がある。本文は半葉十行、行十八字、小字は雙行で行款は同じ、四周雙邊、花口、花魚尾である。

「雅誦義例」によると、同書は朱熹の詩文を選んで編纂したものである。朝鮮李朝の正祖・李祘が自ら選び「詞賦琴操四首、古近體詩二百五十九首、下附箴銘贊題辭、二先生祠文、勸學文五十二首、凡八編四百十五首」を收錄しており、これを『雅誦』と名づけ、同時に壬辰[11]、丁酉[12]の二度にわたって鑄造した銅活字によって印刷したという。時に「己未九月二十有四日」（「御制雅誦序」）、すなわち正祖二十三年（清の嘉慶四年、一七九九年）であった。

この朝鮮本二册は、書形が大きく、紙質は厚くて强靭である。銅活字による印刷は、字行の配列が整っており、墨色の濃淡は均等、邊欄の接合部には隙間がなく、あたかも中國の



早稲田大學圖書館藏古寫本
『山谷詩集注』

刻本のようである。

6.『北磵詩集』

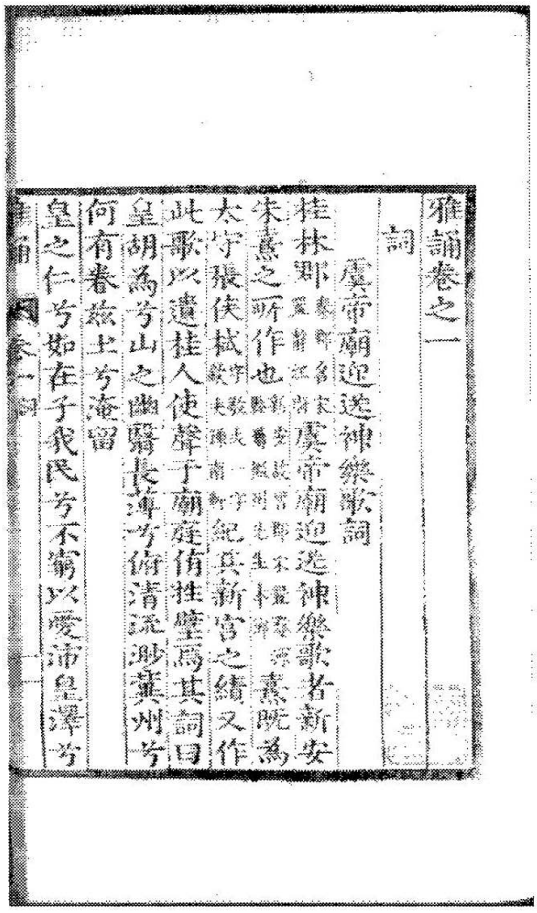
『早稲田大學圖書館所藏漢籍分類目錄』には「九卷　宋・居簡撰　寶永三年八月　木活字版　四册　和大」とあり、圖書記號は「特へ一八―一二八四」である。

同書の卷前には序文、目次がなく、直接本文に入る。第一葉は葉適の「奉酬光孝堂頭善師」詩[13]であり、第二葉より「北磵詩集卷第一」となる。半葉十一行、行二十字、四周單邊、書口の中間に「磵和尚一」と題している。同書は木活字印刷のため、界線がなく、書口にも邊欄がない。全九卷、各卷いずれにも尾題がなく、卷二のうち第二十七葉の「酬于君實」までは目錄に見えるが文はなく、缺葉となっている。

九卷の卷末には「後記」があり、「應安甲□孟春下澣云水僧祖應」の撰となっている。應安（一三六八～一三七五）は日本の北朝の年號であり、應安七年が甲寅の年（一三七四、明の洪武七年）にあたる。祖應は日本の僧である。第十二葉の末行には「時寶永三年亥中秋、植工、常信」の署名がある。寶永三年は清の康熙四十五年（一七〇六）、常信は木活字を組む職人の名である。

同書の墨色は濃淡が均一ではなく、字行の配列、字形ともに整っておらず、木活字の特徴が明らかであり、先に紹介した圖書記號「特へ二〇―一二八三」の五山版（覆宋版）『北磵文集』とは全く異なる版本である。ただし、どちらも作者が居簡であるため、收藏者はこの活字版と五山版を一つの木箱に收めて保存したのである。

『現存宋人別集版本目錄』は『北磵詩集』について、宋刻本九卷が現存し御茶の水圖書館に收藏されていると記しているが[14]、早稲田大學圖書館が收藏する日本の寶永三年（一七〇六）木活字本には言及していない。


雅誦卷之一
詞
虞帝廟迎送神樂歌詞
桂林郡
虞帝廟迎送神樂歌者新安
宋意之所作也
太守張侯拭
紀其新宮之績又作
此歌以遺桂人使聲于廟庭侑牲璧焉其詞曰
皇胡為兮山之幽麝長薄兮俯清流涉冀州兮
何有眷茲土兮淹留
皇之仁兮如在子我民兮不窮以愛沛皇澤兮

早稲田大學圖書館藏銅活字版
『雅誦』

(五)　普通古籍

7．『鐔津文集』

『早稲田大學圖書館所藏漢籍分類目錄』には「一九卷　首一卷　目一卷　宋・契嵩撰　明暦二年四月　京都　荒木利兵衛　十册　和大」とあり、圖書記號は「へ一六―八四一」である。

同書の卷首には「鐔津文集目錄」があり、卷一から卷十八までは詩文（卷十七は詩六十種、卷十八は詩六十九種）、卷十九には諸家の著述が附されている。その次には「鐔津明教大師行業記」があり、熙寧八年（一〇七五）十二月五日に「尚書屯田員外郎陳舜俞」が撰したとある。

本文は「鐔津文集卷第一」から始まり、「藤州鐔津東山沙門契嵩撰」と題している。半葉十行、行二十字、四周雙邊、花魚尾、大黑口、文字の傍らには和式訓點が刻してある。卷一の卷末には「嘉興楞嚴寺經房捐貲刻、鐔津文集卷第一、平湖釋在照對、金陵傅文貞書、溧水端師堯刻、萬暦丙午年[15]季夏月徑山寂照庵識」の牌記がある。この後、各卷の卷末に牌記があり、「對」と「書」のところの人名は同じだが、刻者はすべて異なり、「進賢洪以信」、「溧水端師禹」などとなっている。刊刻の時間も異なり、例えば、卷十九の牌記では「萬暦丁未仲春月徑山寂照庵識」とあり、萬暦三十五年（一六〇七）となっている。また、卷十五の卷末には和刻の牌記「明暦二丙申年四月吉日、荒木利兵衛開板」のみがある。

釋契嵩の『鐔津文集』は、明代に數回の修訂を加えて刊刻された。早稲田大學圖書館藏本は卷十九の卷末に「鐔津文集重刊疏」や「重刻鐔津文集後序」があり、これらによると萬暦三十四年（一六〇六）から同三十五年まで嘉興の楞嚴寺が募金を行い、永樂八年（一四一〇）に杭州徑山寺重刊本を底本として再刻したことがわかる。後に萬暦本は日本へと傳わり、明暦二年（一六五六、清の順治十三年）、荒木利兵衛が京都で開板重刻し、忠實に刻して明の楞嚴寺刻本の原貌を留めたのである。

荒木利兵衛の重刊本と通行の四庫全書本を對照してみると、卷數の分け方が異なる。『四庫全書』所收の『鐔津集』二十二卷の底本は、明の弘治十二年（一四九九）嘉興の僧如巹の刊本であり、第十九卷までは文、詩歌は卷二十、二十一に收錄されており、最後の卷は他者の序や詩、贊や題である。荒木重刊本と四庫本は異なる版本系統に屬している。

8．『須溪先生評點簡齋詩集』

『早稲田大學圖書館所藏漢籍分類目錄』には「十五卷　宋・陳與義撰　宋・劉辰翁評點、江宗白和訓（明和元年跋）　二册　和大」とあり、圖書記號は「へ一八―三〇九四」である。

同書の卷首には、まず劉辰翁の「序」、次に「須溪先生評點簡齋詩集目錄」があり、卷一は賦、卷二から十一までは詩、卷十二から十四までは文、卷十五は「無住詞」である。本文は「須溪先生評點簡齋詩集卷之一」と題しており、半葉十一行、行二十字、小字注は雙行で行款は同じ、四周雙邊、第一葉のみ黑口で他の葉はすべて白口、文字の傍らに和式訓點及び重要箇所を示す記號が刻されている。他に朱筆の圈點や句讀點があり、欄上には墨筆の校語がある。

卷十五の卷末には「嘉靖二十三年甲辰五月上澣承議郎行茂長縣監柳希春」の「跋」があり、また十二行に渡って「金章文、宗修　…　中訓大夫行茂長縣監柳泗、承訓郎守都事李士弼、嘉善大夫全羅道觀察使宋麟壽」の校勘者題名がある。これは朝鮮刻本である。明朝の年號を用い、嘉靖二十二年癸卯（一五四三）に全羅道觀察使の宋麟壽が主導し、前後して茂長縣監の任にあった柳泗、柳希春が校勘を取り仕切り、嘉靖二十三年甲辰五月に刊刻、完成した。

最後には江宗白の「跋」がある。「跋」によると、彼は朝鮮刻本を入手した後、これを書き寫し、和訓を加えて刊刻したという。これは「甲申冬十月」、すなわち日本の明和元年（一七六四、清の乾隆二十九年）のことであった。

このほかに、同書の第一册、第二册卷末の副葉には、それぞれ墨筆で「寶曆十四年」、「寶曆十四歲」と記されている。寶曆は明和の前の年號であり、寶曆十四年（一七六四）は明和元年である。これは收藏者が手書した文字である。

この和刻本は、明の嘉靖二十三年（一五四四）朝鮮刻本を重刻したもので、江宗白の和訓を加えてあり、本文の下にある雙行の小字注は宋末の劉辰翁（一二三二～一二九七）の評點である。早くは光宗の紹熙元年（一一九〇）に胡稚（字は仲孺、號は竹坡）が陳與義の詩詞に箋注を記しており、劉氏の評點は胡注を增補、改訂したものであって、注によっては「增注」と明示している。白敦仁教授はこの「增注」が引用する「武岡本」や「閩本」の二種は諸家の著錄に見えず、「增注」によってのみ佚文が傳わっており、大變貴重だと指摘している。[16]

北京大學圖書館にも『須溪先生評點簡齋詩集』の和刻本が所藏されており、李盛鐸の跋がある。跋には、昔東京の市で購入した際、初めは珍しいものだとは思わなかったが、後に八千卷樓の抄本と校勘したところ「字句之間、則『瞿氏書目』

所列宋刊胡稚箋注本佳處、此本與之悉合（字句の間、則ち『瞿氏書目』の列する所の宋刊胡稚箋注本の佳處、此の本之と悉く合う）」ことを發見し、「此須溪評點本源出宋本無疑（此の須溪評點本、源は宋本より出づること疑う無し）」と判斷したという。『木犀軒藏書題記及書錄』では「蓋朝鮮覆刻元本、日本又從韓本重刻也（蓋し朝鮮、元本を覆刻し、日本又た韓本に從いて重刻するなり）」と考えている。[17]

『現存宋人別集版本目錄』によると『須溪先生評點簡齋詩集』は元刻本が現存しており、靜嘉堂文庫に所藏されている。中國國內に所藏されているのは和刻本のみであり、[18]しかも北京大學にしか所藏されていない。同目錄には「日本重刻嘉靖朝鮮本：北大、日本京都大學」とあるが、この所藏箇所には「日本早稻田大學」を加えなければならない。また、「日本刊本、日本江宗白讀：日本京都大學」の一文は「日本重刻嘉靖朝鮮本」と一緒にしなければならない。「日本重刻嘉靖朝鮮本」と「日本刊本」は同一の刊本だからである。

明の嘉靖本を日本で重刻した『須溪先生評點簡齋詩集』はもともと宋、元刊本によっており、しかも傳世本が少なく大變重要なものである。

9．『岳忠武王集』

『早稻田大學圖書館所藏漢籍分類目錄』には「宋・岳飛撰　明・單恂錄　文久三年三月江戸　和泉屋金右衛門　和中」とあり、圖書記號は「文庫一一―D九一、へ一六―五四、へ一六―二六一二」である。

この本は明の崇禎十一年（一六八三）單恂が選んだ岳飛の詩文詞集であり、全五十三篇、文久三年（一八六三、清の同治二年）に重刻したもので、卷を分かたない一冊本である。

早稻田大學圖書館にはこの版が三部所藏されており、このうち「文庫一一―D八四」は印刷狀態が良い。ほかに後印本、寫本が各一部ある。

この版の卷前には「文久癸亥季春鐫、岳忠武王集、江都玉岩堂版」という牌記がある。卷首には「宋岳忠武王集序」があり、「文久辛酉冬[19]日常陸寺門」の撰である。この次は「岳忠武王小傳」、「岳忠武先生像」、「贊」、「原序」の順で續き、「原序」には「崇禎十一年戊寅人日、單恂題於東皋之白燕庵堂」とある。この後ろに「岳忠武王集目次」があり、書、札、詩、詞など五十三篇を收錄している。

本文には「岳忠武王集、明單恂錄」の署名があり、半葉十行、行二十字、四周單邊、黑口、句讀點及び和式訓點が刻さ

れている。

巻末にはさらに「文久三癸亥季春鐫、江戸横山町三丁目、頒行書林、和泉屋金右衛門」という牌記がある。

この本は明本の重刻であり、刊刻、印刷狀態ともに良い。第二十八葉以降に收錄されている岳飛の詩歌を調べたところ、「題鄱陽巍石山寺」など九首が收錄されている。これら九首と『全宋詩』三十四册・卷一九三五の「岳飛詩」十三首とを對照したところ、出處はすべて異なる。しかも、「金山寺」という題の一首「第一泉頭過九日、黃花猶待客重來。男兒有意扶中國、不斬樓蘭不易回」は『全宋詩』に收錄されていない佚詩であり、『全宋詩』の不足を補うことができる。

10.『眞山民詩集』

『早稻田大學圖書館所藏漢籍分類目錄』に附された補遺には「宋・眞山民撰（文化九年序）江戸　山城屋佐兵衛　和大」とあり、圖書記號は「文庫一一—D二〇一」である。

眞山民は宋の遺民であり、著書には『眞山民詩集』一卷がある。この本は傳本が極めて少なく、傳本は概ね二つの系統に分ける事ができる。一つは明・潘是仁刻本の系統であり、詩を百十七～百二十二首收錄している。もう一つは、元の大德本を底本とする文化九年（一八一二、清の嘉慶十七年）泉澤履齋校刻玉山堂本に代表される和刻本の系統であり、詩を百六十～百六十八首收錄している。現在、中國國內で通行している版本の多くは明の潘是仁刻本から清の四庫本、そして浦城遺書へと續く系統で、基本的には律、絕詩を收錄しており、古體詩は補遺にのみ見える。『全宋詩』の狀況もこの通行本と同じである。しかし、日本の文化九年玉山堂刊本に代表される和刻本は、元人の舊序を留めており、眞山民の人物を考える上で有用である。さらに律詩、古體詩が全て揃っており、詩の收錄數百六十八首は『全宋詩』よりも四十六首多く、宋詩の整理及び研究をする者は注意を拂うべきである。

早稻田大學圖書館所藏の『眞山民詩集』も文化九年（一八一二）玉山堂刊本であり、眞山民の詩を最も完全に傳える本である。これより二年早い村瀨栲亭校刻の岡田群玉堂刊本は、收錄する詩が六首少ない。また、これらより遲い時期に出版された明治三十五年（一九〇二、清の光緒二十八年）近藤元粹評訂、青木嵩山堂鉛印本は岡田群玉堂本の分類に基づき、玉山堂本の補遺詩をこの分類に從い補ったものである。『眞山民詩集』の和刻本について、筆者は以前「眞山民其人其集考」[20]と「和刻本『眞山民詩集』的文獻價值」[21]の二篇をまとめ、版本の

源流と文獻的價値を明らかにしたので、參考していただきたい。

四、結語

以上に述べてきたように、早稲田大學圖書館所藏の宋人別集は、數量に見るべきものがあり（全部で百六種に達する）、しかも版本は多種多様である。地域別では「唐」「和」「韓」の三種類があり、特に「和」本が多い。書物の形式から見ると、刻本、寫本、活字本、石印本、影印本が揃っており、刻本が主となっている。收錄內容から見ると、個人の詩文全集と選集は大體同じくらいである。このうちには校勘價値の高い宋刻元修本、五山覆宋本、古寫本など貴重な善本もあれば、宋、元本を源とし、輯佚價値があり、見逃してはならない和刻本もある。このため、早稲田大學圖書館の宋人別集は、宋人の詩文集を研究するに當たって十分に利用すべき貴重な文獻群だといえよう。

〔注〕

(1)『早稲田大學圖書館所藏漢籍分類目錄』は全一册、早稲田大學圖書館編、平成三年（一九九一）。

(2) 以下、括弧內の數字は書物の種類數である。

(3) 日本語譯は『中國古籍文化研究』第三號（早稲田大學中國古籍文化研究所編、二〇〇五年）に收錄されている。原文は「『後村居士集』版本辨識雜談」（『藏書家』第十六輯、齊魯書社、二〇〇九年）に收錄されている。

(4)「瞿影著錄本」は瞿啟甲輯『鐵琴銅劍樓宋金元本書影』のこと、一九二二年常熟瞿氏影印本がある。

(5) 清・錢曾『讀書敏求記』（點校本、一九八三年、書目文獻出版社）卷四および日本森立之『經籍訪古志』（清・光緒鉛印本）卷六では「見」字の下に「之」字がある。

(6) 紹興乙亥は紹興二十五年（一一五五）。

(7) 宋・徽宗の政和年間、任淵は黃庭堅と陳師道の二家の詩に註釋を加え、當初は家に數十年所藏していたが、紹興二十五年になって許尹に序を請い、後に蜀で刊刻した。

(8) 紹定壬辰は紹定五年（一二三二）。

(9) 嚴紹璗『日本藏宋人文集善本鉤沉』（一九九六年、杭州大學出版社）の第八十八頁による。

(10) ここには「丑」とだけあるが、嘉定年間では十年だけが丁丑（一二一七）である。「四庫全書本」の『北磵集』と對照すると「丑」の前には「丁」字が脫落している。

(11) 壬辰は朝鮮李朝の英祖四十八年（一七七二）であり、清の乾隆三十七年に當たる。

(12) 丁酉は朝鮮李朝の正祖元年（一七七七）であり、清の乾隆四十二年に當たる。

(13)「奉酬光孝堂頭善師」詩は葉適『水心集』卷八にも見えるが、ここでは「奉酬般若長老」と題されている。
(14) 沈治宏『現存宋人別集版本目錄』(巴蜀書社、一九九〇年)の第二八四頁による。
(15) 萬曆丙午年は萬曆三十四年(一六〇六)。
(16) 白敦仁『陳與義集校箋』前言」(『成都大學學报』一九九〇年第四期)による。
(17) 張玉範整理『木犀軒藏書題記及書錄』(北京大學出版社、一九八五年)四十頁に見える。
(18) 上記『現存宋人別集版本目錄』の一七八頁による。
(19) 文久辛酉は文久元年(一八六一)であり、清の咸豐十一年に當たる。
(20)『中國典籍與文化論叢』第十三輯(鳳凰出版社、二〇一一年)の一三四～一四九頁に收錄されている。
(21)『版本目錄學研究』第二輯(國家圖書館出版社、二〇一〇年)の二二五～二四四頁に收錄されている。

(原田　信　譯)

＊　＊

作　者：王嵐
Author: Wang Lan

標　題：日本早稻田大學圖書館所藏宋人別集概述

Title: Individually collected Books of Verse and Prose by the Poets of Song 宋 Dynasty which Waseda University Library Preserves

摘　要：本論文梳理日本早稻田大學圖書館所藏宋人別集概況，其數量達一〇六種，其版本按照國別分〝唐〟、〝和〟、〝韓〟三類，且以〝和〟本居多；從成書形式上看，刻本、寫本、活字本、石印本、影印本一應俱全，又以刻本爲主；從收錄內容上看，個人詩文全集與選集可謂平分秋色。又重點選擇了其中具有版本特色與價值的宋人別集十種加以詳解。

關鍵詞：早稻田大學圖書館　宋人別集　數量　特色版本